

「総合的な学習の時間の指導法」における形成的評価 オンディマンド型遠隔授業における学修プログラムの提案

○名倉昌巳^{1,2}

Masami NAGURA

¹岩手大学教育学部理科教育科, ²元大阪市立築港中学校

【キーワード】 総合的な学習の時間の指導法, 形成的評価, フィードバック, 教員養成, 遠隔授業

1 問題の所在

学習指導要領の改訂により「総合的な学習の時間」では、教科横断的な「目標」を定めて、育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが求められている。つまり「学校教育目標」を基に「全体計画」等を作成できる実践力が、現場や教員養成で問われている。

一方、コロナ禍により大学では遠隔授業が主になり、対面では可能であったアクティブ・ラーニングや、即時的なフィードバックが困難になった。しかも、オンディマンド型では学生の自主性に依存しがちである。よって、形成的評価を中心においた学修プログラムを試みた。

2 形成的評価による授業設計

(1) 調査対象の学生と到達目標

本遠隔授業 (Google Classroom/Zoom 使用) の受講生は、私立 B 大学教育学部 (小学校) 所属の主に 2 回生 113 人で、その「到達目標」を表 1 に示す (担当者 3 人によるオムニバス)。

表 1 到達目標: 2021 年度 B 大学 (シラバスより)

児童・生徒が、各教科の特質に応じた見方・考え方を成長させ、総合的・統合的に活用することで、探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成が実現できるようにする。そのために、総合的な学習の時間の指導計画の作成や学習活動の指導・評価に関する知識・技能を身に付け、実践への応用ができるようになる。
(傍線筆者)

(2) 授業の概要と形式

3 人の担当者の「各遠隔授業の形式」、及び「各回の主な学習内容」を表 2 に示す。

表 2 遠隔授業 (オムニバス) における各担当 (3 人) の授業形式と各回の概要: 2021 年 4 月~7 月

担当	回・形式	各時限の主な学習内容
A	1~3・RT	背景と現状・思考ツール・ICT 活用
B	4~6・RT	探究的学び・協働的学び・評価
筆者	7~15・OD	意義と位置づけ・全体計画・年間計画・実践事例・単元計画と指導案作成

※ 表中の RT: 同時双方向, OD: オンディマンドを示す

(3) 形成的評価による学修プログラム

筆者が担当した第 7~15 回までの授業 (表 3) について、主に学生の提出物から、図 1 の形成的評価による学修プログラムを評価した。

第 7 回【考えてみよう①】: 各学年の探究課題

を統合するテーマの検討】⇒8 回【練習①: 目標と全体計画作成】⇒11 回【課題③: 全体計画と評価規準作成】を、また、9 回【考えてみよう②: 年間計画の必要性】⇒10 回【練習②: 年間指導計画作成】⇒15 回【課題④: 単元計画と指導案作成】を、それぞれ中核に据え、段階的に、かつ系統的に学べるように設計した (図 1)。

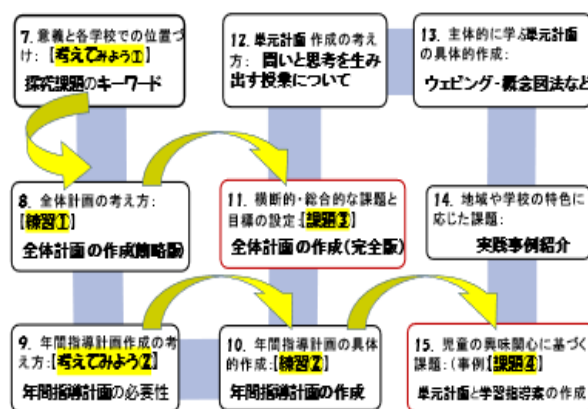


図 1 遠隔授業における形成的評価による学修プログラム (矢印は各【課題】間の連関・系統性を示す)

3 研究の方法

【考えてみよう①・②】では意見を投稿させ、全体への講評によるフィードバックを行った。

【練習①・練習②・課題③・課題④】ではレポート提出させ、そのうち【練習①・②・課題③】にはコメントを付け返却し、個人にフィードバックを与えた。学生の提出物【課題③・④】について総括的評価を行い、結果と分析に用いた。

4 結果と分析

評価結果は表 3 のようになった。

【考えてみよう①】⇒【練習①】⇒【課題③】では、学修内容の系統性が伺える。一方で【練習②】(年間計画)⇒【課題④】(単元計画と指導案)の系統性が弱く、今後の検討を要する。

以上により、形成的評価による学修プログラムの提案が可能であるが、改善の余地も残る。

表 3 各課題における評価結果 (N=112)

	平均値 \bar{X} (100 点満点)	標準偏差 σ
課題③	81.7	12.51
課題④	61.8	10.89